

恕（じょ）の精神

校長 館岡 靖哲

3学期も早折返しとなる如月（2月）に入りました。今年の冬はここ数年の暖冬傾向とは異なり、気温の低い日が多く、北風の強い冬らしい日が続いています。乾燥した日も続いており、感染症にも注意が必要です。引き続き健康管理についてご協力をお願いいたします。

3年生は1月22日（水）～24日（金）を中心に私立高校の入学試験にチャレンジをしました。進路先が決定し、胸をなで下ろしている姿が見受けられる一方、多くの3年生は2月26日（水）、27日（木）の県公立高校の受検に向けて準備を続けています。3年生の皆さんがこの試練を乗り越え、自身の成長につなげてくれると信じています。また、2年生は1月30日（木）から2泊3日で「自然の教室」を、同時に1年生も31日（金）に東京方面で校外学習を実施しました。学校を離れて集団活動をする貴重な機会となり、成長した姿が印象に残ります。

ところで、2学期の終業式の式辞で、「恕（じょ）」について話をしました。これは、以前訪れたことのある日本最古の学校「足利学校」（栃木県足利市）で、入場口に掲げられていた漢字です。足利学校の創建については、奈良時代説、平安時代説、鎌倉時代説などがありますが、多い時には4,000人もの人々が学びに来ていたと言われています。天文18年（1549）にはイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルにより「日本国中最も大にして、最も有名な坂東の大学」と世界に紹介されたことも納得がいきます。ここでは、見ず知らずの多くの方が共に学ぶために必要なこととして、大切にしてきたものが「恕」といわれています。

話は変わりますが、私は日本の歴史に係る書物を読むことが楽しみの一つです。特に私の推しは歴史小説家の「童門冬二」（どうもん ふゆじ）でした。しかし、令和6年1月13日に童門冬二さんが逝去されていたことが今年の1月13日（月）に公表されました。童門さんが名誉館長を務めていた東海市立平洲記念館（愛知県東海市）の追悼文からも、童門さんもいかにこの「恕」の精神を大切にしていたかが伺えます。

先生は生前、サインを頼まれると必ず「恕 じょ」という文字を添えていらっしゃいました。先生はこの「恕」という言葉は、「相手の立場に立って物事を考えること」、「自分の持っているやさしさ、思いやり、温もりの量の多いこと」と言う意味合いであり、「日本人の心」であるとおっしゃられていました。さらに、現代に生きる細井平洲先生の教えもまた、「恕」の精神であると度々述べられています。そして、童門先生御自身もまた、「恕」の精神を体現される方でありました。童門先生に接した方はみんな、先生の、相手の立場に立った言葉、おもいやり、やさしさに触れたことと思います。童門先生が生涯をかけて伝えてきた「日本人の心」である「恕」の精神は、これからも私達が大切に次の世代へと伝えてまいります。

東海市立平洲記念館HPより引用

私が毎朝、昇降口や階段、廊下の清掃をしていると、「校長先生、いつもありがとうございます」と明るい笑顔で挨拶してくれる生徒がいます。その日は気分よく過ごせます。温かい心で人に接する。心から優しい言葉を人にかける。そんな生徒が増えていったら嬉しいですね。